

解答は、すべて解答用紙に記入して必ず提出してください。

# 簿記能力検定試験(新形式参考問題 1)

## 問題用紙

### 基礎簿記会計

(平成31年×月×日施行)

**問題用紙（計算用紙含）は回収します。持ち帰り厳禁です。**

#### 注 意

- ・試験開始の合図があるまで、問題用紙は開かないでください。
- ・この試験の制限時間は1時間30分です。
- ・解答は、問題の指示にしたがい、すべて解答用紙の指定の位置に記入してください。
- ・解答用紙の会場コードは、試験担当者が指示した6桁の数字を頭の0(ゼロ)を含めてすべて書いてください。  
受験番号は右寄せで書いてください。左の空白欄への0(ゼロ)記入は不要です。  
受験番号1番の場合、右寄せで1とだけ書いてください。  
受験番号90001番の場合、右寄せで90001とだけ書いてください。  
受験番号を記入していない場合や、氏名を記入した場合には、採点の対象とならない場合があります。
- ・印刷の汚れや乱丁、筆記用具の不具合などで必要のある場合は、手をあげて試験担当者に合図をしてください。
- ・下敷きは、机の不良などで特に許されたもの以外は使用してはいけません。
- ・計算用具(そろばん・計算機能のみの電卓など)を使用してもかまいません。
- ・解答用紙は、持ち帰りできませんので白紙の場合でも必ず提出してください。  
解答用紙を持ち帰った場合は失格となり、以後の受験をお断りする場合があります。
- ・**簿記上本来赤で記入する箇所も黒で記入すること。**
- ・**金額には3位ごとのカンマ「,」を記入すること。**  
ただし、位取りのけい線のある解答用紙にはカンマを記入しないこと。

主 催 公益社団法人 全国経理教育協会  
後 援 文 部 科 学 省  
日 本 簿 記 学 会

## 簿記能力検定試験問題(新形式参考問題1)

## 基礎簿記会計

解答は解答用紙に

第1問 次の帳簿記入について述べた文章のうち、正しいものには○、誤っているものには×を解答欄に記入しなさい。(12点)

1. 帳簿の金額欄の記入において、金額は、下から行の半分ぐらいまでに書き入れる。このようにするのは、訂正に備えるためである。
2. 日付の記入では、同じ日には「//」と書くが、転記を確実にするために利用される丁数欄では、上の丁数と同じであっても「//」と記入してはならない。
3. 金額欄に単線を引き合計を出し、その下に複線を引いたとき、複線の意味は、それまでの計算を終了させ、その合計額を、その後の計算に影響させないことを示す。
4. 帳簿に記入した取引の証憑(領収書などの証拠書類)は、その取引を正しく帳簿に記入した後であれば、保管しなくてもよい。

第2問 次の取引を仕訳しなさい。勘定科目は、下の中から最も適切と思われるものを選ぶこと。(32点)

現 金	普 通 預 金	売 掛 金	貸 付 金
商 品	備 品	買 掛 金	借 入 金
資 本 金	会 費 収 入	内 装 料 収 入	運 送 料 収 入
商 品 販 売 益	消 耗 品 費	交 通 費	給 料

1. 自治会役員が市役所に書類申請に行った交通費¥1,600を現金で支払った。
2. 自治会の会費¥2,000を現金で集金した。
3. シャンプーなど消耗品¥2,500を現金で購入した。
4. 自己資金として、現金¥2,000,000を出し(出資し)、内装業を開業した。
5. 日本工芸品店は、¥350,000の伝統工芸品を関東工房から購入し、その代金は掛けとした。
6. 日本工芸品店は、原価¥350,000の伝統工芸品を関西商店へ¥430,000で販売し、代金は掛けとした。
7. 関西商店への掛け代金¥430,000が、全経銀行にある当店(日本工芸品店)の普通預金口座に振り込まれた(掛け代金を受け取った)。
8. 日本工芸品店は、全経銀行からの借入金のうち¥200,000を、普通預金口座から返済した。

**第3問** 次の複式記録に関する会計構造式の(ア)から(エ)の金額を求めなさい。(16点)

期首：期首貸借対照表

資 産	負 債	純資産(資本)
620,000	280,000	(ア)

⇩

期中：損益計算書

収 益	費 用	当期純利益
(イ)	880,000	(ウ)

⇩

期末：期末貸借対照表

資 産	負 債	純資産(資本)
(エ)	310,000	360,000

なお、期中に、資本の追加出資や引き出しなど収益費用以外の純資産(資本)の変動はなかった。

**第4問** バレーボール同好会の次の試算表(現金出納帳と元帳制を採っている)により、会計報告書を作成しなさい。(8点)

試 算 表			
試合参加費	43,000	前期繰越金	12,000
コート使用料	52,000	会費収入	180,000
用具購入費	76,000		
現金	21,000		
	<u>192,000</u>		<u>192,000</u>

\*項目(勘定科目)と金額は、問題のために少なくしている。

**第5問** 美術工芸品店を営んでいる全経商店の次の元帳残高により、貸借対照表と損益計算書を作成しなさい。(32点)

現金	¥ 30,000	普通預金	¥580,000	売掛金	¥ 430,000
商品	240,000	貸付金	800,000	備品	600,000
買掛金	350,000	借入金	280,000	資本金	2,000,000
商品販売益	845,000	受取利息	25,000	給料	270,000
広告費	78,000	交通費	62,000	通信費	86,000
水道光熱費	34,000	支払家賃	285,000	支払利息	5,000

※氏名は記入しないこと。

【禁無断転載】

会場コード
受験番号

簿記能力検定試験(新形式参考問題1)

基礎簿記会計 解答用紙

得点
点

制限時間  
【1時間30分】

第1問採点

第1問 (12点)

	1	2	3	4
正誤記入欄				

第2問採点

第2問 (32点)

	借 方		貸 方	
	勘 定 科 目	金 額	勘 定 科 目	金 額
1				
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				

<b>第3問採点</b>

**第3問** (16点)

(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
¥	¥	¥	¥

<b>第4問採点</b>

**第4問** (8点)

【解答にあたっての注意】 支出項目の配列は試算表の配列によること。

バレーボール同好会会計報告書  
 自×2年4月1日 至×3年3月31日

会 長 全経 花子  
 会 計 大塚 好恵

収入の部：	前期繰越金	[	]		
	( )	[	]	[	]
支出の部：	( )	[	]		
	( )	[	]		
	( )	[	]	[	]
	次期繰越金			[	]

第5問採点

第5問 (32点)

貸借対照表

全経商店 平成30年12月31日 (単位：円)

資 産	金 額	負債および純資産	金 額
現 金		買 掛 金	
普 通 預 金		借 入 金	
売 掛 金		資 本 金	
商 品		当 期 純 ( )	
貸 付 金			
備 品			

損益計算書

全経商店 平成30年1月1日～平成30年12月31日 (単位：円)

費 用	金 額	収 益	金 額
給 料		商 品 販 売 益	
広 告 費		受 取 利 息	
交 通 費			
通 信 費			
水 道 光 熱 費			
支 払 家 賃			
支 払 利 息			
当 期 純 ( )			

会場コード				
.....	.....	.....	.....	.....
受験番号				
.....	.....	.....	.....	.....

簿記能力検定試験問題(新形式参考問題1)

基礎簿記会計 解答

得点	
	点

制限時間  
【1時間30分】

第1問 (12点)

@3点×4=12点

	1	2	3	4
正誤記入欄	○	×	○	×

第2問 (32点)

@4点×8=32点

	借 方		貸 方	
	勘 定 科 目	金 額	勘 定 科 目	金 額
1	交 通 費	1,600	現 金	1,600
2	現 金	2,000	会 費 収 入	2,000
3	消 耗 品 費	2,500	現 金	2,500
4	現 金	2,000,000	資 本 金	2,000,000
5	商 品	350,000	買 掛 金	350,000
6	売 掛 金	430,000	商 品 販 売 品 益	350,000 80,000
7	普 通 預 金	430,000	売 掛 金	430,000
8	借 入 金	200,000	普 通 預 金	200,000

第3問 (16点)

@4点×4=16点

(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
¥ 340,000	¥ 900,000	¥ 20,000	¥ 670,000

第4問 (8点)

●印@2点×4=8点

【解答にあたっての注意】 支出項目の配列は試算表の配列によること。

バレーボール同好会会計報告書  
自×2年4月1日 至×3年3月31日

会 長 全経 花子  
会 計 大塚 好恵

収入の部：	前期繰越金 ● [ 12,000 ]		
	(会費収入) [ 180,000 ]	● [ 192,000 ]	
支出の部：	(試合参加費) [ 43,000 ]		
	(コート使用料) [ 52,000 ]		
	(用具購入費) [ 76,000 ]	● [ 171,000 ]	
	次期繰越金	● [ 21,000 ]	



第5問 (32点)

●印@4点×8=32点

貸借対照表

全経商店		平成30年12月31日		(単位：円)
資 産	金 額	負債および純資産	金 額	
現 金	30,000	買 掛 金	350,000	
普 通 預 金	● 580,000	借 入 金	280,000	
売 掛 金	430,000	資 本 金	2,000,000 ●	
商 品	● 240,000	当 期 純 ( 利 益 )	50,000	
貸 付 金	800,000			
備 品	600,000			
	2,680,000	●	2,680,000	

損益計算書

全経商店		平成30年1月1日～平成30年12月31日		(単位：円)
費 用	金 額	収 益	金 額	
給 料	270,000	商 品 販 売 益	● 845,000	
広 告 費	78,000	受 取 利 息	25,000	
交 通 費	● 62,000			
通 信 費	86,000			
水 道 光 熱 費	34,000			
支 払 家 賃	285,000			
支 払 利 息	5,000			
当 期 純 ( 利 益 )	50,000 ●			
	870,000	●	870,000	

第1問<帳簿の作成や記入の仕方など会計人として知っておくべき帳簿の基本的役割・機能についての出題>

帳簿は、一定のルールに則り作成されなければならない。一定のルールは、会計慣行の中で洗練されてきた帳簿の作成記入の仕方であり、会計人共通のルールとなってきた方法である。

1. 金額は、下から行の半分くらいまでに書き入れ、文字は、行の3分の2までに書き込む。このようにするのは訂正に備えるためであり、金額の訂正は、誤った金額全体を赤の「二重線」で消し、その上に、正しい金額を書き込む。文字の訂正は、誤った文字のみを赤の「二重線」で消して訂正する。「二重線」の上に「訂正印」を押すことも求められる。
2. 月は、月が変わらない限り記入せず、日は、最初に記入したのち、同じ日には「//」を書く。丁数欄も、上の丁数と同じときは「//」を記入し、上と同じであることを示す。  
ただし、新しいページになった場合には「//」としない。
3. 金額の下に引いた単線は、上の「数値の計算をせよ。」という命令であり、計算の終了を指令するときには、金額の下に複線（二重線）を引く。複線を引いた金額は以下の計算に関わらないことを示す。
4. 支出の証明である領収書など、取引の事実を証明する書類を証憑（しょうひょう）いう。証憑にもとづいて帳簿記入がなされる。帳簿記入が適正になされたことの証拠書類であり、帳簿といっしょに保管しておかなければならない。

第2問<簿記の出発点である仕訳（複式記録）ができるかどうかを問う出題>

会計が行われる場所あるいは範囲を会計単位という。この会計単位において現金が増加したときは、現金収支を記録する帳簿の左側（借方）に金額を記入し、減少したときには右側（貸方）にその金額を記入する。直接記入する前に、どの勘定のどちら側に、いくら記入するか決定することを仕訳という。現金の増加を借方に記入し、現金の減少を貸方に記入することは、簿記の出発点となる原則である。まず現金について考え、その原因を反対側に記入するという原則を理解する。その後、この原則を拡張していくことによって、様々な取引を仕訳できるようになる。

1. 自治会（会計単位）の現金が¥1,600減少し、その原因は自治会活動に必要な交通費である。
  2. 自治会（会計単位）に現金¥2,000が増加した。その原因は、会費収入である。
  3. 会計単位（個人、グループ、企業などのいずれか）で現金¥2,000が減少した。
  4. 開業した内装業（会計単位）に現金¥2,000,000が増加した。このように事業を行うための元手として個人から会計単位に出資された（会計単位が預かって利用する）金銭や財産の金額を資本金という。
- 5～8

営利企業に特有の販売するための物品（商品）の購入（仕入）とその販売（売上）および銀行との取引について出題した。

5. 現金で購入したときは、現金が減少するので、貸方が現金、借方は商品である。商品を購入した（商品は増加する）ので、借方は商品であるが、現金支払いでの仕入ではなく、後日支払いとなる掛けとした場合は、貸方を買掛金とする（将来の現金支出）。
  6. 商品の増加は借方に記入し、減少は貸方に記入する（現金と同じ）。掛けで販売したので借方は現金ではなく売掛金とする（将来の現金収入）。販売によって商品は減少するので、商品は貸方に記入し、借方と貸方の金額の差額は、商品を販売したことによる利益であり、商品販売益の貸方に記入する。借方金額と貸方の合計金額は必ず一致する。
  7. 6. で増加した売掛金は、借方に記入した。回収されれば売掛金はなくなる（減少する）ので、減少額（本問では全額）を貸方に記入する。普通預金の増加は、現金同様、借方に記入する。普通預金は、銀行へ請求すれば現金を入手することができる権利であり、現金や売掛金と同じく、その増加を借方に、その減少は貸方に記入する。
  8. 現金を借入ると、会計単位に現金が増加するが、将来返済しなければならない義務が増加する（生じる）ので、借方：現金、貸方：借入金と仕訳ける。借り入れたときに借入金の貸方に記入されているので、返済すれば、この借入金は減少するので、反対側の借方に記入する。返済による普通預金の減少は、現金同様、貸方に記入する。
- \* 現金や商品や備品、普通預金や売掛金などを簿記会計では「資産」という。資産に属する勘定は、その増加を借方に記入し、減少は貸方に記入する。買掛金や借入金などの「負債」は、反対に、その増加を貸方に記入し、減少を借方に記入する。なお、資本金は、返済しなければならない期限が決められていない（あるいは絶対に返済しなければならない義務ではない）点で、負債ではないが、個人から企業が預っているものであり、負債と同様に、その増加を貸方に、減少を借方に記入する。収益は資本金の増加であるから、その増加額を貸方に記入し、費用は減少として借方に記入すると、まずは理解しておけばよい。

### 第3問<会計の構造に関する出題>

営利分野では、期首の貸借対照表から始まり、期中の利益獲得活動を経て、期末貸借対照表に至る。期中の利益獲得活動を表示するのが損益計算書である。ここで計算された利益は期末純資産（資本）に反映される。つまり、「期首純資産（資本）＋当期純利益＝期末純資産（資本）」の算式になる。ただし、なお書にあるように、資本の追加出資や引き出しはなかったものとしている。また、「資産＝負債＋資本（純資産）」を貸借対照表等式といい、「資産－負債＝純資産（資本）」を純資産（資本）等式という。「費用＋当期純利益＝収益」（→「収益－費用＝当期純利益」）を損益計算書等式という。上記の理解により、(ア)・(エ) → (ウ) → (イ) と計算できる。

$$\begin{array}{ll} \text{(ア)} \quad \yen 620,000 - \yen 280,000 = \yen 340,000 & \text{(エ)} \quad \yen 310,000 + \yen 360,000 = \yen 670,000 \\ \text{(ウ)} \quad \yen 360,000 - \yen 340,000 = \yen 20,000 & \text{(イ)} \quad \yen 880,000 + \yen 20,000 = \yen 900,000 \end{array}$$

### 第4問

最初に、会計記録をまとめた試算表から会計報告書を作成できるかどうかを問うている。

ここでは、各項目を縦にならべて報告内容を表示する形式の「報告式」の会計報告書の作成を求めている。なお、会計報告書は、表示形式によって、「報告式」と「勘定式」に区別されるが、これは形式の違いであり、報告する内容は同一である。収入の部と支出の部を左右対称的に勘定形式でその内容を表示するとき、「勘定式」の会計報告書という。

## 第5問<会計報告書作成と解釈の出題>

本問は、会計の目的である会計報告書を作成できるかどうかであり、これは基礎簿記会計資格取得の最大の目標となる。

まず、会計記録にもとづいて作成される主要な財務諸表である貸借対照表と損益計算書を、元帳残高から誘導作成できるかどうかを問うている。ここで作成する会計報告書は、左右対称的に表示する勘定形式によるものであり、「勘定式」の報告書とよばれている

貸借対照表には、企業名（会計単位）と作成日（本問では、平成30年12月31日）を表示する。

「資産＝負債＋資本」（本問では、 $¥2,680,000 = ¥630,000 + ¥2,050,000$ ）を示し、これを貸借対照表等式という。また、「資産－負債＝純資産（資本）」（本問では、 $¥2,680,000 - ¥630,000 = ¥2,050,000$ ）を示し、これを純資産（資本）等式という。貸借対照表は、一般に、企業の一定時点（作成日）の「財政状態」を表していると説明される。

損益計算書には、企業名（会計単位）と会計期間（本問では、平成30年1月1日から平成30年12月31日まで）を必ず表示しなければならない。「費用＋当期純利益＝収益」（本問では $¥820,000 + ¥50,000 = ¥870,000$ ）を示し、これを損益計算書等式という。損益計算書は、一般に、企業の一定期間（示した会計期間）の「経営成績」を表していると説明される。